



## 司馬遷の史記 (2000年前の経済的な感覚)

3月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所  
2022年3月1日(火)

最近、**司馬遷の史記**を読んでいる。

**2000年以上も昔の感覚**は、新鮮で簡潔で、本格的に現在を越えている。  
現在の軽薄短小がいかにも文字通りといった低い印象を強くした。

史記130巻のうち、人臣の伝記を書き連ねた**列伝69巻の最初に聖人の精神論**を表現する「伯夷列伝」を置き、**最後に物質を重視する「貨殖列伝」**を配している。

**人間精神の美しさの対極**に、他の史書には見られない**物質主義を強調し、「衣食足りてこそ」、2000年前においても、すべての活動の基盤が、その経済活動にあることを明らかにしている。**

約**2500年前**の中国春秋時代末期、江南の「呉」と「越」は天下の覇者の地位をかけて中国を二分する抗争を演じた。いわゆる「**呉越戦争**」である。

「范蠡」は、「越」の重臣として、「越王勾践」を助け、艱難辛苦に耐えて、「呉」を滅ぼした後、「**久しく尊名を受くるは不詳なり**」と、「飛鳥尽きて良弓蔵され、狡兔死して走狗(犬)煮らる」の言葉を残し、越を去った。

「越」を富強にした范蠡の理論と実践は、**范蠡計然の七策**と言われ、次のようなものである。

①時節に心して必要なものを知る、②五行説に従い経済と自然の循環を知る、③物価は循環するので、安い時に仕入れ、高い時に売る、④農民を疲らせるような安価は商業も停止させる、⑤物質の流動は、治国の道である、⑥物資は場所を適切に変更することによって流通する、⑦物資の流通は、人に依存せず自分の責任で行う。

范蠡は、越を去る時にこう言った。

計然の策は七策あったが、我々は**その五策**を実行し、宿願である越の再興を達成できた。**残りの二策**を自分の家政に応用したいものだと言って、宰相の位を捨て、姓を朱公と変え、越(浙江省)から、齊(山東省)に移り経済活動を行った。

朱公となった范蠡は「**陶**」こそは**天下の中央**に位し、諸国との交通、交易の中心地であると考え、**商業を営み、物資を蓄積し、相場の変動を利用して利益**をあげ、個々人から搾り取るようなことはしなかった。

こうして**19年の間に千金の巨富を積むこと三度**に及んだが、そのうち二度までこれを散して貧しい友人や遠縁の者に分け与え、**陶朱公の富を築いた。**